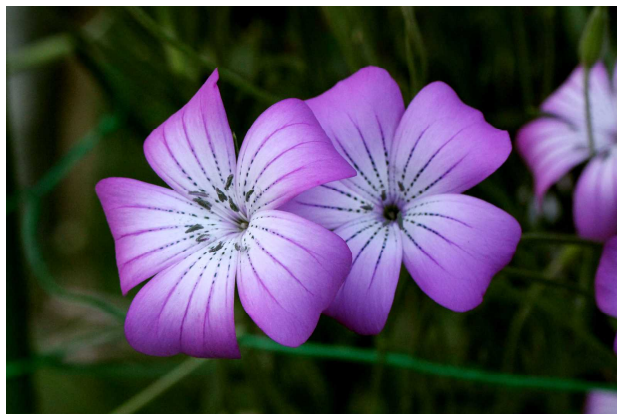


『今月の天候と農作業』

通巻第5579号
5月号
平成27年 4月 30日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【概要】

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 5月2日(土)～5月8日(金)

気圧の谷や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日があるでしょう。

※詳しくは、週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2週目の予報> 5月9日(土)～5月15日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響で、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3週目から4週目の予報> 5月16日(土)～5月29日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすく、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

1 水管理と病害虫防除

茎数が株当たり20本程度になったら、無効茎抑制や根の健全化、倒伏軽減のため「中干し」を行います。落水は5～7日で、軽く足跡が付く程度とします。いもち病が発生しやすい時期なので、ほ場観察や予察情報に注意しましょう。

2 穂肥

月末から6月上旬にかけて穂肥時期です。コシヒカリは倒伏しやすいので、幼穂長が1㍍になってから、葉色を見て行います。基肥・追肥の一発タイプ肥料施用の水田では必要ありません。

◆ 普通期水稲

1 田植時期と土づくり

高品質米生産には、田植え前の準備も重要です。「ヒノヒカリ」は出穂期以降に高温に遭うと白未熟粒が多発し、品質低下が起こりやすいので、極端な早植えは避けます。また、深耕で十分な作土層を確保したり、ケイ酸質資材や有機物施用で土づくりに努めましょう。

2 育苗管理と田植え

塩水選後、「シンガレセンチュウ」や「馬鹿苗病」等防除のため種子消毒を行います。

籾に気泡が付いていると薬剤効果が落ちるので、籾袋を揺すり気泡を抜きましょう。

出芽時が高温であったり日数が長くなると、苗が徒長し病害が発生しやすくなります。芽の長さが1㍍程度で緑化作業に移り、その後も高温多湿に注意します。田植時はいもち病等対策で薬剤の箱処理を行います。補植後の余り苗はすぐに処分します。

◆ 麦類

1 収穫作業

成熟期の目安は穂首が黄化し穀粒からも緑色が抜け、爪を立てるとロウくらの硬さになった頃です。コンバイン収穫時期はその数日後（水分30%

以下) とします。収穫後高水分のまま長時間経過すると品質が低下するので速やかに乾燥します。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 収穫後期のハウス管理

促成・半促成栽培のきゅうり、ピーマン等の果菜類は収穫後期です。外気温が上昇し、ハウス内の温度も高くなるため、作物の生長スピードが早くなり、生長に合わせてかん水量を増やすこととなります。一方で、作物からの蒸散量も増しハウス内湿度が高くなるなど、ハウス内環境は病害が発生しやすい状況となります。整枝、摘葉等で出た残渣はその都度ハウス外に持出し、ハウス内を清潔に保つとともに、温湿度を下げるため、妻面やサイドの開放など、積極的な換気に努めましょう。また、収穫した果実は直射日光を避け、風通しの良い所に置き早めに出荷するなど品質保持に努めましょう。栽培終了のほ場では、ウィルス媒介害虫であるアザミウマ類、コナジラミ類のハウス外への飛散を防止するため、収穫終了後に10日以上ハウスを締切り、蒸し込みを行った後、残渣を持ち出すようにしましょう。

◆ きゅうり

気温も高く果実の肥大が促進されるため、収穫遅れのないよう適期収穫を心がけましょう。また、葉からの蒸散量も多くなり、水分不足による草勢低下やハウス内の乾燥による先細り果、曲り果等が発生しやすくなります。内張カーテンを利用した遮光やハウス内の湿度の確保をおこなうとともに、かん水や追肥による草勢維持に努めましょう。かん水は1株あたり2～3ℓ/日程度、追肥は10㎡あたりチッソ成分で0.2kg/日程度を目安に施用します。着果数が多く肥大の悪い場合は葉面散布も効果的です。また、ハウス内の乾燥が激しい場合は、通路等へ散水し、ハウス内湿度を適度に保つようにしましょう。

◆ ピーマン

茎葉が繁茂し、光線の透過不足による「白果」や収穫忘れによる「赤果」の発生が多くなります。また、着果の多いところでは成り疲れによる草勢の

低下から、うどんこ病が発生しやすくなりますので、適期収穫を心掛けるとともに、果実上部の着果のない中枝や老化枝及び主枝の整枝・せん定を行いましょう。一方で、直射光線による日焼け果や高温による尻腐れ果の発生も多くなりますので、日中の強光線時には内張カーテンを活用して光線の調節を行います。ピーマンの根は乾燥に弱く、土壌水分が不足すると草勢が著しく低下しますので、こまめなかん水・追肥を心掛けます。かん水・施肥の目安はきゅうりの項を参照してください。

◆ トマト類

主枝の摘心により果実肥大は進みますが、ハウス内の高温は乱形果や着色不良の原因となりますので、換気を徹底し、ハウス内の温度を下げるよう努めましょう。茎葉からの蒸散量も多くなるため、かん水量も増やしますが、一度に多量のかん水ではハウス内の湿度を高め、裂果や灰色かび病の発生を助長しますので、1回あたりのかん水量を少なくして、かん水回数を増やすようにしましょう。かん水の目安は、1株あたり1～1.5ℓ/日程度です。

◆ イチゴ

二次親株の採苗時期ですが、炭そ病の発症が疑わしい株については、直ちに廃棄することが蔓延を防ぐこととなります。あらかじめ廃棄する分を考慮に入れて親株を多めに準備しておきます。本ぼにうどんこ病やハダニが発生している場合には、苗にうつる恐れがありますので、育苗床での作業を優先した作業手順としましょう。

◆ 夏秋果菜類

中山間地域を中心に、雨よけトマト、露地きゅうり等の定植期となりますが、定植後の活着をスムーズ行うことが、その後の作柄に大きく影響してきますので、定植後1週間はこまめなかん水管理に心掛けましょう。

(黒木 正晶)

葉茎根菜類・いも類

◆ かんしょ

普通栽培の植え付け期です。植え付けはなるべく曇天日を選び、苗のしお

れや葉の痛みを防ぎます。また、苗は採苗してすぐ植えるよりも、数日乾燥しないように保管した苗（以下：取り置き苗）の方が発根が早くなるので、取り置き苗を使いましょう。

◆ スイートコーン

ミニハウスや大型トンネル栽培の収穫期を迎えます。アブラムシ、メイチュウ類がつきやすいので適期防除により商品性向上に努めましょう。また、収穫適期の幅が狭いので、早朝収穫の徹底と調整時も品温を上げないよう品質保持に努めましょう。

◆ さといも

中晩生種の普通栽培で、5月に出る芽は、親芋の芽です。二本以上出ているものは、大きい芽を一本残して他はかき取ります。また、ほ場が乾燥すると生育が遅れるので積極的にかん水を行い、生育を促します。

◆ らっきょう

下旬から収穫期に入ります。土壌水分が多いときに収穫すると、腐敗しやすくなりますので、天候に注意して収穫します。また、ウイルスに感染した株を種球として残さないように注意しましょう。ウイルス罹病株は、球が小さくびったりとくっつき合って、分けにくいことや葉のよじれが目立つことで区別できます。

(杉村 幸代)

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

今年の着花量は、樹や地域によりばらつきがあり、全体としてはやや少ない傾向が見られます。着花量の少ない樹では、新芽との養分競合によって生理落果が多くなることが予想されるため、着花の見られない枝を、前年枝の基部から除去しましょう。

極早生温州の火山灰土壌でのマルチ栽培では、5月中～下旬がマルチ被覆

の時期になります。園地周りから雨水が浸入せず、水はけの良い設置条件を確保し、過乾燥や減酸対策として、かん水施設を設置しましょう。

黒点病の発生源となるせん定枝や枯れ枝は、速やかに処分しましょう。

かんきつ類に被害を及ぼすゴマダラカミキリに寄生するカビを利用した、効果の高い防除資材が開発されています。設置適期が5月下旬から6月上旬です。普及センターやJAに相談してみてください。

◆ 完熟きんかん

結果枝の充実促進のために、窒素主体の葉面散布やたっぶりのかん水を行い、大きな葉をつけることで結果枝の充実促進を図りましょう。

また、5月下旬に発根促進剤を施用することで一番果の結果安定が図られます。具体的な方法について、普及センターやJAに相談してみてください。

◆ マンゴー

5月から6月にかけては、本県産マンゴーの出荷最盛期です。施設内の湿度を下げるのがヤニ果や病害果の発生防止に有効です。ビニルの開閉やヒートポンプにより、適切な湿度で管理しましょう。

速すぎる剪定は第三新梢や第四新梢の発生を助長し、花芽分化に向けた管理が難しくなります。翌年の出荷時期を考えながら適切な時期の剪定を心がけましょう。

(山口 和典)

花き

◆ 夏秋ギク

育苗・定植・摘心・側芽の整理作業や消灯・再電照等の管理については、それぞれの作型に応じて計画的に行ないましょう。「フローラル優香」は、導入している系統に適したジベレリンの散布回数・濃度等を確認し、散布を実施してください。「精の一世」については、消灯後は完全シェードの11時間日長で管理します。7月出荷作型は幼若性を獲得する恐れがあるので、消灯前は12℃程度、消灯後は18℃程度の夜温を確保しましょう。

◆ 秋ギク

採穂用親株の挿し芽は、作型と穂冷蔵の有無を考慮し、所要日数を計算し

て計画的に作業を進めてください。キクの腋芽は高温で消失しやすくなりますので、腋芽の伸びにくい品種・系統は親株床をできるだけ涼しくし、必要に応じてBA剤を散布しましょう。

◆ スイートピー

受粉後45日程度で莢の色が緑色から黄色に変わってきたら採種をおこないます。収穫した莢は風通しの良い日陰で乾燥させ、種子を取り出した後、選別を実施し殺菌剤で消毒後、冷暗所で貯蔵します。

◆ ホオズキ

結実時期に入ります。間引き・葉かきを行い良品生産に努めましょう。極端な低温や高温では花粉の発芽不良により実の着きが悪くなるので温度管理に注意します。6月の着色期は防除期間が限られるため、各種の病害虫防除は5月に定期的に行うことが重要です。マルハナバチの巣箱は日陰を作るなど、涼しい場所に置いてください。

◆ シキミ

春芽の伸長から硬化時期になります。特に黒シミ斑点病ならびにサビダニ類はこの時期の防除が重要ですので、確実に実施しましょう。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜防疫対策

韓国等の近隣諸国において口蹄疫の発生が続いています。また県内の16農場において、PED（豚流行性下痢）が発生しています。高病原性鳥インフルエンザに関しても台湾での発生がみられていることから、家畜防疫体制には最大限の注意を払いましょう。今月は、気候が安定し、家畜の生産性が上がる時期ではありますが、日中に気温が上昇するため、温湿度環境を見ながら、細霧装置や換気対策等の飼養管理を徹底しましょう。

◆ 飼料作物

今月は飼料用稲やトウモロコシ・ソルガム等の作付け時期です。自給飼料の確保のため、計画的な作付けを行いましょ。また、近年、自給粗飼料の品質低下が問題になっています。土壌分析を行わず、たい肥のみの施肥では、飼料作物が必要とする栄養分が十分ではなく、特に粗タンパク質の低い飼料作物しかできません。そのような品質の悪い粗飼料を与えると栄養バランスが崩れ、牛の発情が弱くなる、あるいは発情が来ないということがあります。最寄りの農業改良普及センターにご相談いただき、土壌分析を行って、分析結果に基づいた施肥管理により、良質な粗飼料生産に努めましょ。

(三角 久志)

特用作物

◆ 茶

1 摘採と整枝

二番茶を摘採する茶園では、芽揃いを良くするために、一番茶の摘採7～10日後頃を目途に整枝を実施します。

2 茶園の更新

樹高が高く、枝条が細くなった茶園は更新が必要です。中切りは、一番茶直後が望ましく、中切り位置は高さ40～50㌢、枝幹の太さ4～5㌢の位置を目安に実施します。また、低温被害等の影響で新芽の揃いが悪い園では、浅刈りや深刈り更新等で良質茶生産に努めてください。

3 病虫害防除と施肥

クワシロカイガラムシの防除を行う場合は、幼虫の初発を確認して二週間後頃が防除適期となりますので、ふ化状況を見ながら、掛けむらのないように丁寧に薬剤を散布しましょ。特に、雄繭が目立ち枝枯れが見られる茶園では、中切りと組み合わせて防除を実施してください。

また、チャノキイロアザミウマやチャノミドリヒメヨコバイ等の害虫、炭疽病や黒葉腐病等の病害に対する防除は、二番茶萌芽～開葉期に地区基準に準じて実施します。

施肥は、一番茶摘採前後に速効性の化成肥料を施用してください。

4 チャトゲコナジラミの発生に注意

以下の項目に注意して茶園を観察し、チャトゲコナジラミが発生していないかどうかを確認してください。なお、本虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の関係機関へ

連絡してください。

- ①成虫は新芽に群がるので、茶園では新芽を観察する。
- ②茶園のうね間にあるクモの巣などを観察する。
- ③摘採袋や製茶工場の生葉コンテナの周囲を観察する。

(黒木 清人)

◆ しいたけ

1 本伏せ

今の時期は、急な温度上昇が考えられますので、ほだ木の温度・湿度の管理に注意が必要です。仮伏せ中のほだ木は、しいたけ菌の活着が確認でき次第、水はけや風通しのよい場所に組み替えます。

裸地伏せでは、直射日光による高温や乾燥を防ぐため、笠木を厚さ30センチ以上かぶせます。

林内伏せでは、下刈や整理伐により風通しを良くし、日陰が不足する場合は笠木等で補います。

2 ほだ場管理

梅雨入り前に、防風ネット等の除去を行うとともに、ほだ場とその周辺の雑木雑草を刈り払うなどして、通風を良くします。また、倒れたほだ木等の整理を行い、害菌の発生に注意します。

(吉行 浩太郎)

◆ たばこ

- 1 中葉下位着位（旧下葉）は取り遅れがないように心止までに収穫し、それ以降の着位は、適熟葉収穫に努めましょう。
- 2 わき芽抑制剤は、わき芽の大きさと天候に注意し、使用基準を守って散布しましょう。わき芽抑制剤使用後は、野帳・使用実績表へ記入しましょう。
- 3 心止は、地力や樹勢を考慮して時期、深さを調整して、行いましょう。曇雨天が続くときは仮止を行い、天気回復を待って止め直しましょう。病害虫を防止するため、心止後の花軸部は、除去したわき芽と同様にほ地外に持ち出し適正に処理しましょう。
- 4 病害防除対策として、排水溝の完備等、耕種的防除を中心にしながら、効果的な農薬防除による対策に努めましょう。農作を使用した際には、野帳・使用実績表へ記入しましょう。
- 5 異物混入防止のため、ほ地でのマルチ片の回収と収穫吊り込み、取り

下ろし及び荷造り後の葉元確認、包の確認を行いましょう。

(井上 馨)

内容の詳細について

5月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策 (5月)

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	葉いもち	並	イネミズゾウムシの発生がやや多くなっています。イネミズゾウムシの成虫が10株当たり5頭以上のほ場、スクミリンゴガイの生息数が多いほ場では粒剤の水面施用を行います。施用にあたっては水管理に十分留意し、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも4日間(薬剤によっては7日間)はかけ流しや落水はしないよう注意します。
	イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ	やや多 並	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 やや多	アブラムシ類は各種ウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め、早めに防除します。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病	やや多 やや少 並	べと病対策として換気をよくし、過湿防止に努めます うどんこ病は乾燥条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。 ミナミキイロアザミウマによって媒介される黄化えそ病が非常に多くなっています。栽培終了時の蒸し込みを確実に行うとともにほ場周辺の除草に努めます。ミナミキイロアザミウマは、施設内では卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で少なくとも3回の連続した防除を行います。
	ミナミキイロアザミウマ 黄化えそ病 (MYSV)	やや多 前年より少ない、前々 年より多い	
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病	並 並	いずれの病害も発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおきます。罹病した茎葉等は感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。 アザミウマ類は、気温の上昇とともにさらに増殖しやすくなるので、初期防除に努め中～多発ほ場では7日間隔で少なくとも3回の連続した防除を行います。
	アザミウマ類	並	
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病	並 やや少	灰色かび病に罹病した茎葉は適宜除去し園外に持ち出すとともに、多発ほ場では治療効果のある薬剤で防除します。 栽培終了時は、黄化葉巻病を媒介するタバココナジラムシ類の拡散を防止するため、蒸し込み等により本虫を死滅させた後に残さを処分します。また、ほ場周辺の雑草・野良生えトマトは、病原ウイルスの感染源や本虫の増殖源となるので除草を徹底します。
	タバココナジラムシ類 黄化葉巻病 (TYLCV)	並 やや多	
果樹全般	果樹カメムシ類	—	ウメやモモなどの結実中の果樹類では、飛来に注意し初期防除を徹底します。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 灰色かび病	並 並 —	そうか病、かいよう病に罹病している枝葉は、感染源となるため徹底的に除去します。 灰色かび病の防除適期は落弁期です。また開花期から落弁期にかけての降雨は、本病の発生に好条件となるので注意が必要です。 ミカンハダニは、要防除水準(寄生葉率30%あるいは10葉当り寄生虫数5～10頭)に達したら速やかに防除します。
	ミカンハダニ	並	
茶	炭疽病	並	カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマは、多発してからでは防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努めます。 フェロモントラップにおけるチャハマキの誘殺数が多くなっており、注意が必要です。 クワシロカイガラムシの薬剤散布量は、成園で10a当たり1,000リットルを目安に、枝幹に十分かかるように丁寧に行います。また、激発園で、ふ化最盛期が一番茶後になる場合は、中切り更新して防除すると有効です。 黄色粘着トラップにおけるチャトゲコナジラムシの誘殺を4月1半旬に確認しました。多発するとすす病が発生しますので早期発見に努めます。
	カンザワハダニ	並	
	チャノコクモンハマキ	並	
	チャハマキ	やや多	
	チャノホカ	並	
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	
チャノキイロアザミウマ	並		
ツマグロオアシカメ	並		
クワシロカイガラムシ	やや少		

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki> です。